

2023年6月

■今月の特選句



ワープロのあの字行進目借時

土屋泰山

パソコンの前でキーボードを押したまま、うとうと。目が覚めると、画面には「あああああああああああ」の連続文字。目借時によくみられる現象。



ほんとうはみんなかなづち鯉幟

森岡香代子

愉快的発見がいい。「かなづち」という俗な表現、普段着の言葉もいいね。もっとも鯉幟は四万十川に行けばちゃんと泳ぐ。環境だな。



来てくれて帰るから好き子どもの日

南とんぼ

「孫は来てよし帰ってよし」は、爺婆になって実感するものである。「来てくれて」の表現がなんとも温かい。日常の実感が句になって残るのはいいね

■今月の特選句



泣き黒子乾かしている梅雨晴間

桑田愛子

哀しみと可笑しみのある滑稽句である。実際に乾かしているのは泣き顔なのだが、泣き黒子を乾かすとしたところに詩が生まれた。



菜の花の黄の帝国となりにけり

田中 勇

「黄の帝国」がいい。一面の菜の花畑が満開で、黄色の明るさに圧倒される。群生することで生まれた力強さを「帝国」と表現したのが斬新である。



海苔巻の黒船出たり江戸前屋

北熊紀生

海苔巻といっても軍艦巻だね。軍艦巻は、昭和十六年に銀座の名店「久兵衛」が考案した。何事も、誰も思いつかない手法、視点を発見してこそ。

■今月の秀逸句（・・・七七をつけてみました）

卯浪にも負けず劣らぬ人の波 ・・・コロナ明けなるハチ公の前	月城花風
スキップの蝶ネクタイは蝶になる ・・・結ぶ前には蛹のかたち	工藤泰子
カブトエビ雲に乗らむと田を跳ねる ・・・田水に映る雲を代用	加藤潤子
さくらさくらさくらさくらの並木道 ・・・天女になりし気分を通り	白井道義
空梅雨や非常勤といふ身分 ・・・荒梅雨といふ多忙懐かし	遠藤真太郎
小遣いの満額回答春の夢 ・・・末頼もしき労使交渉	柳村光寛
少子化で長寿に税金四月馬鹿 ・・・長寿が社会を支える時代	青木輝子
風をはらめば十月十日や鯉のぼり ・・・鯉の一家に家族また増ゆ	井口夏子
海の日 of 遥かを見遣る龍馬像 ・・・龍馬とならびその目細める	西野周次
単一電池と同じ大きさ兜虫 ・・・単二単三ならどんな虫	浜田イツミ
馬鹿なのに馬鹿を演じて四月馬鹿 ・・・ホントの馬鹿に演技はできぬ	久我正明
かたつむり島の守りにならぬ角 ・・・ウインクしてもお役に立てず	柳 紅生
独活の香や老師の文字のいと優し ・・・パソコンの字は人柄見えず	ほりもとちか

■今月の滑稽句

* 今月の特選句・秀逸句以外の佳句を青字で表示しています。

ドローン飛び立つ水馬のごと	相原共良
早乙女の手櫛の為の水鏡	相原共良
藪を出ずはづかしがりやのうぐいすは	相原共良
寄ってみた大樹だったが木下闇	青木輝子
七三の昭和は遠し鳥雲に	青木輝子
古稀からは鳴かず飛ばずよ万愚節	赤瀬川至安
愚痴りあふとは鳥の巣を突つこと	赤瀬川至安
かの音は妻かもうんにや蛙鳴く	赤瀬川至安
熱湯を浴び青ざめる蕨かな	井口夏子
検索や筍料理のあれこれも	井口夏子
七転八倒それもハッピーブレイキン	池田亮二
春爛漫居酒屋乗っ取る娘子軍	池田亮二
代掻きの田に佇むや二羽の鷺	石塚柚彩
終りなきバトル始まる草むしり	石塚柚彩
キャッチボールの孫はサウスポー子どもの日	石塚柚彩
ひなあられ見る間に二合食べし妻	伊藤浩睦
末は力士か白酒一升飲み干す子	伊藤浩睦
一貫目の新生児たり子どもの日	伊藤浩睦
夜桜や別れ話は女から	稲沢進一
金魚草見知らぬ猫が通り過ぐ	稲沢進一
ねじり花心ねじれてゐないはず	稲沢進一
青空が吸ひ込んでゆく鯉のぼり	稲葉純子
初夏の風バトンタッチは爽やかや	稲葉純子
扇風機夏以外には潜伏期	稲葉純子
新茶汲み饒舌の人黙らせて	井野ひろみ
斑猫や迷子にさせるつもりらし	井野ひろみ
ピンク色の星くずめきてサツキかな	上山美穂
薫風の花の香草の香屋根かける	上山美穂
屋上は五月の小鳥の相談室	上山美穂
四万十の五月の空を鯉のぼり	梅野光子
薔薇の香に春宵の道迷ふかな	梅野光子
薫風や吾娘きりりと弓を引く	梅野光子
剛制す柔肌なるや五月富士	遠藤真太郎
面かぶりやストレスフリーに鬼太鼓	遠藤真太郎
今日だけの知り合い春の体験会	大林和代
黄砂なのか曇天なのか吾何者か	大林和代
選挙ポスター浮き世にそろへ緑さす	大林和代
一句詠む庚申庵の藤のれん	小笠原満喜恵
春うらら網代めがけて櫓を漕ぐや	小笠原満喜恵
春雷の怪しき光に犬縮む	小笠原満喜恵

春闘や平和が好きで戦はず	岡田廣江
虎杖に値段がついて道の駅	岡田廣江
花みかん香りは夕べに重く満つ	岡田廣江
川走り蛭はがしてはまた走り	加藤潤子
頭垂れお遍路さんも鈴蘭も	加藤潤子
仕事して遊びも覚え昭和の日	門屋 定
青春の立志に燃えた昭和かな	門屋 定
昭和の日何時も浪曲聞かされた	門屋 定
夫婦仲三食目には氷解け	北熊紀生
飛魚や海に過酷な刑あるか	北熊紀生
春雨に気持ちゆるみて傘忘れ	木村 浩
月を待ちぬれて帰るか春の雨	木村 浩
コイのぼりせめて来世は長身に	金城正則
あの人もこの人も逝った蓮華道	金城正則
綾羅木の春の空ゆくグライダー	金城正則
水槽を出たい出たいと亀の鳴く	久我正明
桜散る月の砂漠に昼が来て	久我正明
AIやchatの議論もたつく団子花	工藤泰子
あぢさみの地球の色を手はじめに	工藤泰子
春昼の扉ゆつくり閉まるかな	桑田愛子
野つばらの土管のドカン子どもの日	桑田愛子
トラックの陰に工事夫三尺寝	小泉和子
久々の列車の旅やソーダ水	小泉和子
チューリップ子ども目で追ひ声で追ふ	小泉和子
ホームラン打ちて兜やショウタイム	佐野萬里子
朝掘りの大筍は糠添へて	佐野萬里子
黄沙降る洗ったばかりの車にも	佐野萬里子
桜鯛婚姻色にお洒落して	壽命秀次
検診車妻なけなしの乳房持ち	壽命秀次
背を割りて指先を発つ天道虫	壽命秀次
診察の結果は加齢春愁	白井道義
腕白も鳴りをひそめて入学す	白井道義
早朝の眠る筍掘り起こす	鈴鹿洋子
春眠や寝かせてやれと五時間目	鈴鹿洋子
目の窪むびんずる尊者薄暑かな	鈴鹿洋子
五時のチャイム雨降っても五時告げる	鈴木和枝
長引いた風邪アンパンマンに抱かれ寝る	鈴木和枝
鳩を見てごらん今日が一番いい日	鈴木和枝

小麦とて侮れまいぞアレルギー	高須賀溪山
独活もらいヌタも天ぷらも持て余す	高須賀溪山
その昔オランダの花チューリップ	高須賀溪山
帰省客道路停滞皆無口	高田敏男
柏餅指に残り香犬も知る	高田敏男
子どもの日野球少年兜つけ	高田敏男
急に来られ持て成し難き夏日かな	竹下和宏
歳時記のもつともあつき夏ならむ	竹下和宏
十薬ふゆ人の減る国嗤ふかに	竹下和宏
晴れの日には登りたくなる春の山	田中 勇
私を観てごらんよと山桜	田中 勇
雲梯のへそ見えている夏蜜柑	田中やすあき
韋駄天のぶらぶら歩き雲の峰	田中やすあき
腹筋の割れてたくまし磯の蟹	田中やすあき
鶯の雛その枝にケキョケキョと	谷本 宴
五月晴電線少し恥ぢてをり	谷本 宴
音痴から脱皮してゆく夏近し	谷本 宴
蟻の列いやいや並ぶ奴もいる	田村米生
蝶々の三角関係もつれ飛ぶ	田村米生
つくし摘み足腰年齢まだ二十歳	田村米生
新緑に焦がれ褪せゆく造花かな	月城花風
夏富士の嶺より高き車内の荷	月城花風
街角を新聞ダンス青嵐	土屋泰山
喜べぬ風にも柳は握手する	土屋泰山
閨住(うるすみ)や卯浪に浮かぶ島の影	長井知則
思い出に捻じれのあまた文字摺草	長井知則
古女房古茶にも負けぬコクを出す	長井知則
蝸牛亡き愛犬の小屋伝う	永易しのぶ
通学路捕まるまいぞと雨蛙	永易しのぶ
紫陽花に招かれ主人(あるじ)なき庭の	永易しのぶ
滝の水開き直って落ちゆけり	西野周次
忘れたきことをくりと白日傘	西野周次
少子化に男女相乗り端午の日	花岡直樹
ばあちゃんになっても母の日は母の日だ	花岡直樹
五類へとなりしコロナにビア祝杯	花岡直樹
身は縮み口縦に伸び蜘蛛の出て	浜田イツミ
桜薬降れば心がこぼれたる	浜田イツミ
恋の猫神の御前憚らず	久松久子
梅雨に入る雨神様の出番です	久松久子
鶯は経読む鳥かホ一法華経	久松久子

身の色の金属めきし初鯉

幾万のことば光らせ電波の日

くすぐったくさせる形の夏蕨

この頃のマスクはただのお呪ひ

周り見て付けて外してマスクかな

見回せば惰性のマスクそちこちで

雨に泣く八重チュウリップは首疲れ

生ビールジョッキの数ほど厠へと

夏めきてメタボの腹が気に掛かる

陽炎や八十四年のおほかたは

踏青やけふは海まで行きたくて

去り際を心得ている花吹雪

風に向く深紅の薔薇の名はサムライ

筍が出たと隣家のお裾分け

蒲焼の香にそそらるる路地薄暑

多数決性に合はぬと蟾喰る

二日灸したとか認知症だとか

新社員背広に残る躰糸

団扇を作るKISSの隠くるる大きさに

母の日はづんで居りし妻の声

花筏水面に招き入れらるる

花吹雪舞ふ道行かば甘茶寺

ひとつずつ薔薇の香りを食べ歩く

天守閣若葉の山に座してこそ

立ち上がる意欲は陽炎のごと燃えて

柿若葉見たくて足が回り道

別人になれた心地に髪洗ひ

蜷取り用意しすぎた保冷剤

Tシャツで迎えに出れば夏来たる

風を斬る翼を試す燕の子

品格のあるしゃっくりや初音とは

新社員失敗の度得るものが

雪濁りどこまで行くや佐渡までか

飛雨急雨挿木に送るエールかな

満濃の丘のネモフィラ空の青

赤ちゃんの椿の葉っぱツヤツヤと

緑摘む松のためならエンヤコラ

新緑の息吹いただく深呼吸

雑草と呼ばれる草ほど早く伸ぶ

振り返るたびに丈伸ぶ夏の草

日根野聖子

日根野聖子

日根野聖子

藤森荘吉

藤森荘吉

藤森荘吉

細川岩男

細川岩男

細川岩男

ほりもとちか

ほりもとちか

南とんぼ

南とんぼ

峰崎成規

峰崎成規

峰崎成規

椋本望生

椋本望生

椋本望生

村松道夫

村松道夫

村松道夫

森岡香代子

森岡香代子

八木 健

八木 健

八木 健

八塚一青

八塚一青

八塚一青

柳 紅生

柳 紅生

柳村光寛

柳村光寛

山岡純子

山岡純子

山岡純子

山下正純

山下正純

山下正純

わらびもち付けて海苔弁進化して

牡丹園一本のこらず牡丹かな

筍の先出てエビの尾のごとし

AIのニュース聞いている鯉のぼり

藤房のゆらゆら浮世忘れてる

盛り上がる初夏の列島四年ぶり

糸切れの凧は宇宙を目指すのか

次世代に追ひ立てられし夏落葉

黄沙とて風がうまいと鯉のぼり

楊貴妃の胸とも見えて牡丹かな

ばあちゃんはプリンに口開く燕の子

お地主様(おじのっさん)の祠の光る柿若葉

大朝寝夢の続きは目玉焼

新緑を撫でおはやうと歌ふかに

人も鳥も浮かれさせたる四月来る

山本 賜

山本 賜

山本 賜

横山洋子

横山洋子

横山洋子

吉川正紀子

吉川正紀子

吉川正紀子

渡部美香

渡部美香

渡部美香

和田のり子

和田のり子

和田のり子